

「『坊つちやん』は真に大教育書なり」

——明治四〇年代、教員読者と「坊つちやん」——

出 木 良 輔

はじめに

夏目漱石「坊つちやん」(『ホトトギス』明治三十九年四月)の発表当時、漱石の勤務先であった松山中学校の教員たちは漱石の「記憶のいゝのに驚」き、「十年前の事を能くも斯う書けたものだと言ひ合した」というが、松山時代の漱石と関わりの無かった一般の教員たちにとって、「教師」や「教育」を語るこのテキストはどのように読まれ得るものだったのだろうか。

漱石の作品は明治三十九年には既に教材としても受容され始めており、この頃には多くの教員や師範学生の人気を博していたようだ。中でも「吾輩は猫である」などは教員による評論文が教育雑誌上に掲載されているが、「坊つちやん」が教員という読者層にどう受け入れられ、あるいは教育言説においてどう語られてきたのかということはこれまで詳らかにされてこなかった。

本稿ではまず、教員を読者として想定するメディアである教育雑誌に掲載された「坊つちやん」関連記事を概観し、教育関係者による受容のありようを検討する。同時にこのテキスト内部の表現について、教員を取り巻く同時代の社会状況や教育言説を背景として考察し、とりわけ「教育」や「教師」をめぐる教員たちの語りについて再考を加える。

特に二つ目の作業は、同時代の学校教育に対しテキストが内包する批評性を捉えてゆくことに繋がるはずだが、今さら「教育批判」を「坊つちやん」の〈主題〉として定位することがここでの狙いではない。「坊つちやん」を論じるこれまでの研究においても、「教育批判」という「モチーフ」はしばしば見出されてきているからだ。

例えば、教員や教育を描く文学作品から教育史を再考するという観点から「坊つちやん」を取り上げる教育史研究者の伊ヶ崎暁生は、教員の労働環境に対する批判的な語りに着目しながら「当時の教育

批判になっていく小説」としてこのテキストを位置づける。また、同時代の新聞・雑誌報道を賑わした「学校騒動」というトピックがテキストに織り込まれていることに着目した小笠裕二も、「坊っちゃん」を明治三十八年の学校騒動を中心とする教育界の悪しき典型の再現として捉える」視点を通じて、「教育批判を「坊っちゃん」の間接的なモチーフの一つ」として見出す。

明治末期の学校教員たちは、いわばこうした「批判」に曝され得る当事者であったわけだが、同時に彼ら自身も「坊っちゃん」という「教育」や「教師」を語るテキストから種々の「批判」を見出し得る存在であったはずだ。「坊っちゃん」から「教育批判」を抽出する従来の論は、教員という同時代読者によって見出され得る「批判」の可能性を看過してきた。

そこで本稿では、明治後期の言説編成や教育思想のパラダイムとこのテキストの語りの符合あるいはズレを確認することで、「批判」の内実の再検討を試みる。このテキストには、様々な社会的言説に取り巻かれた「おれ」という教員の姿が描かれる。理想の「教育」「教師」を説く教員たちの言葉、あるいは「おれ」に付される「渾名」や新聞報道などがその例だが、同時代言説を視座にこれらを検討することで、そこに内包された「批判」をより具体的なものとして提示したい。

こうした作業を通じて、教員という読者層がこの作品からどのよ

うな意味を引き出し得たのかということをも、教育雑誌上で活字化されたレベルにおいてのみならず、テキストが内包する表現のレベルでも把握してゆくことが本稿の目的である。

なお本稿では、「坊っちゃん」本文をすべて『鶉籠』（春陽堂、明治四〇年一月）から引用した。教員を含む明治四〇年代の読者の多くは、初刊本『鶉籠』の本文を通して「坊っちゃん」を受容していたと推察されるためである。

一、教育雑誌の中の「坊っちゃん」

発表直後から「教育界の裡面」を描き「諷刺」した作品として評価されてきた「坊っちゃん」は、それ以降も「教育界の裡面」への好奇心を充たし、あるいは掻き立てる「諷刺小説」¹⁰として享受されてゆく。大正四年には川路柳虹も、「中学教員はこれを読んで其内心の秘密の暴露された事を思ふと同時に、田舎の中学教室にある一種卑屈な空気、田舎にある厭ふべき地方的因習、それから本当の教育問題」について「只笑つて過せない」感想を抱くだろうと述べ、やはり「抜目のない技巧によつて描かれた風刺小説」として「坊っちゃん」を評価する¹¹。

川路は「中学教員」が「坊っちゃん」をどのように読むかということに関心を向けているが、同時代評のキータームでもあった「教育界の裡面」というトピックは、教育雑誌においても盛んに取り沙

汰されると共に、教育関係者たちも匿名での投稿を通じてそこに参加していた。金港堂発行の教育雑誌『教育界』は明治三〇〜四〇年代にかけて多くの読者投稿を受け入れているが、そこで例えば以下のような投書を見ることが出来る。¹²

或人曰く、小学校の教員は先づ神聖で然程もありませんまいが、中学校の教員は余程ひどいものです、時間が多いのが不平だとか、月給が少しでも上げればよいとか、或は上の御機嫌をとるとか、日々献身的にやるものがあれば夫をねたむとか、いやはや中学の教員程けちからい俗物はありませんと、あ、果して真か、此の気風。

教員たちはこのように、投稿を通じて自身の見聞した学校や教員の「裡面」を暴露することで日々の溜飲を下げていたのだろう。注目すべきは、中学校や中学教員の「裡面」を語るこうした言説において、時に引き合いに出されるのが「坊っちゃん」だったことだ。

欽風生「中学の裏面」(『教育界』明治四二年一〇月)は、「吾人も漱石の筆あらば「坊っちゃん」以上面白き中学職員の裏面を描かんと、筆其意に任せず、実に遺憾に堪へず」と前置きした上で、「坊っちゃん中の赤シャツの如き可悪あり。ウラナリの如き可憐なるあり。小嵐の如く、一見は厭や奴で心中は与すべき者もないではない」と、自身の同僚教員たちに「坊っちゃん」に做った渾名を付けながらその素行を紹介してゆく。不良学生に対し「厳刑」を課すか否かを議論

する「職員会」で「いつもつまらぬ事を夕方迄喋舌つて居る」教員たちを皮肉る記述などはまさに「坊っちゃん」をなぞるかのようだが、この記事の筆者もやはり「面白き中学職員の裏面」を描いた作品として「坊っちゃん」を定位する。この記述からは、「教育界の裡面」を語る言説において「坊っちゃん」がいわば模範の如く機能していた様子が見て取れよう。

愛媛の教員たちによるモデル論議も教育雑誌上で展開される。例えば右の記事と同じく『教育界』に掲載された羽陵生「愛媛県教育者評判記」は、かつて実在した「松山の乱暴時代」を描いた物語としてこの作品を評価すると共に¹³、数学教員の渡部政和を山嵐のモデルとして紹介する¹⁴。もっともこうした議論も先の「面白き中学職員の裏面」を描いた作品という評価も発表直後の同時代評の反復に過ぎないのだが¹⁵、教育雑誌には教員読者の独自の「読み」を窺わせる言説も僅かながら存在する。

その一例として挙げられるのが、大日本国民中学会発行の『教育公論』社評欄に掲載された「坊っちゃん」の学校観(師範の新卒業生に餞す)(明治四二年三月)だ。無記名の記事だが、筆者は同誌の創刊・編集の中心だった峰間鹿水(信吉)だろう。明治二八年から六年余を小学校教員として過ごした峰間は、小学校教員の待遇の悪さに失望しその改善の必要性を認識する。その後明治三九年頃から小学校教員俸給国庫補助の実現に向け奔走するなど、明治後期

に教員の待遇改善に尽力した人物として知られる¹⁶⁾。

ここで筆者は、「狸的」にして「野太鼓的」、すなわち「自己完全主義、利己主義乃至害他的」に傾きつつあるという教育界を「救治するの策」として「教育上の文学的作物」の効用に着目する。そうした「文学的作物」の一例として取り上げられるのが「坊っちゃん」だ。

教育上の文学的作物に至りては、本邦まことに其の著作に乏し。

小泉教授の「棄て石」¹⁷⁾は其の積極的方面の作物にして、教師をして真の教師たるべく感興せしめんと企てたるもの。夏目漱石氏の「坊っちゃん」は其の消極的方面の作物にして、今の学校の通弊をモデル的に具体的に剔抉して、教師者をして静に机を擁して深刻に反省せしめんと企てたるもの、而して十二分に其の目的を達せり。「坊っちゃん」は真に大教育書なり。

「師範の新卒業生に餞す」と副題が付されていることから分かるように、特に若い教員たちに「坊っちゃん」を紹介・推奨する内容となっている¹⁷⁾。この中で筆者は「教育上の文学的作物」として明治四〇年代にきわめて多くの教員読者を獲得した「教育小説」である小泉又一『小説棄石』(同文館、明治四〇年五月)¹⁸⁾と「坊っちゃん」を取り上げ、前者とは異なる形で「今の学校の通弊」への批評性を有している点において「坊っちゃん」は真に大教育書なり」と説く。さらに末尾では「坊っちゃん」が「教育社会に弘布」されることを望み「本邦教育のために本書が幾十版を重ねんことを祈

るとまで述べ、この作品を「教育」的観点から絶賛している。

漱石作品が教育関係者にも人気を博していたことは冒頭で触れた通りだが、それらの中でも「坊っちゃん」は「本邦教育のために」有益な「大教育書」として教員たちに提示されていた点において特異な作品だと言える。明治四〇年代、『鶉籠』の刊行も相俟って多くの読者を獲得しつつあった「坊っちゃん」は、「教師」や「学校」の「裏面」を語る際の模範として教員に受容されるのみならず、教員に「反省」を促す「大教育書」いわば一種の教育言説として評価・推奨されてもいたのだ。

一方でこのテキスト内部の表現に目を向けたとき、そこに「学校」や「教育」の価値を転覆するような「おれ」の語りが多々見出されることは言うまでもない。「教師を体験することで「おれ」は教育の価値を反転させた」という阿部和正の指摘が示すように¹⁹⁾、「おれ」は教員経験を通じてむしろ「教育者の精神」を語る教員たちの偽善的な面を発見し、「教育」を俗悪なものとして語ってゆくのだ。以下では、このテキストが内包する「教育批判」について検討を加えてゆく。

二、「外来者」の二重性

大野淳一は、近代教育制度の整備が「形式上中学校からすればすべての教師有資格者が等しく採用候補となり、有資格者からすれば

すべての中学校が等しく就職可能な職場となる」ような状況を生んでいたと指摘する²⁰。自らも東京から移動してきた「おれ」は「渡りもの」の赤シャツ兄弟を悪しざまに語るが、彼らのみならず当時多くの中学教員が好待遇の職場を求めて各地の学校を転々とする「渡りもの」と化していたのだ。「坊つちゃん」の物語の背景には、教員を取り巻くこのような社会的状況が存在することとなる。

一方でアメリカにおける教員研究の祖であるW. ウォーラーも、こうした移動を余儀なくされる近代学校教員の生態に触れ、さらに「地域社会」が「教師を超俗的価値の伝道者として、彼にいろいろギコチない制限をおしつけ、これによって教師を孤立させてしまう」ことを問題化している²¹。

その際ウォーラーは教員を「地域社会の青少年に一定の技能・専門的知識を伝えるため雇われた外来者」と言い表しているが、「おれ」は二重の意味で「外来者」である。すなわち彼は東京から四国の「地域社会」に参入した「外来者」であると同時に、学生の世界から「教育界」へと足を踏み入れた、教師の世界における「外来者」でもあるのだ。「教育界」が外界から断絶した〈聖域〉の如くイメージされ得る領域であることは、物語終盤に挿入される「四国新聞」の記事に記された「彼等をして再び教育界に足を入るゝ余地なからしむる事を」というくだりからも見て取れよう。

この二重性について順を追って見てゆこう。「地域社会」にお

る「外来者」である「おれ」は、四国に到着した直後から「まつ裸に赤ふんどしをしめてゐる」「船頭」や「鼻たれ小僧」の姿を観察しては、「野蠻な所だ」「氣の利かぬ田舎ものだ」といった感想を抱く。だがこうした観察の視線は当然一方的なものではなく、被観察者としての「おれ」の姿も例えば以下のように描かれてゆく。

（前略）生徒は八釜しい。時々図抜けた大きな声で先生と云ふ。先生には応へた。今迄物理学校で毎日先生々々と呼びつけて居たが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。何だか足の裏がむづ／＼する。（中略）

三時間目も、四時間目も昼過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出了た級は、孰れも少々づつ失敗した。教師は、はたで見る程、染ぢやないと思つた。（三）

初出本文では傍点部が「教師ははたで見える程ぢやないと思つた」と記されているが、『鴉籠』本文では教員の職を「業」なものとして見ていた「おれ」の意識の変化が明確に語られてゆくこととなる。これまで教員を「先生々々と呼びつけ」、彼らを無関心に「はたで見える」存在だった「おれ」だが、自身が「先生」と呼ばれ、教員として〈見られる〉立場であることをここで自覚し始めるのだ。

被観察者としての「おれ」の姿がより分かりやすく描かれるのが、「天麩羅事件」を中心とする一連のエピソードだ。「団子」を食べ「温泉」に行くといった私的行動を「生徒全体」に「探偵」されている

ように思い、「鼻の先がつかへる様」に感じたという「おれ」の語りは、先に見た通り「渡りもの」＝「外来者」と化すことを余儀なくされていった近代学校教員の感覚を代弁し得るものでもあったはずだ。

さらにこのテキストにおいて特徴的なのは、生徒を含む「地域社会」の人々が「おれ」に様々な「渾名」を付与し、「おれ」という教員のイメージを記号化し流通させてゆく点だ。「天麩羅先生」「赤手拭」など、何気ない行動によって生じた「渾名」、いわば「おれ」という教員が纏わされた社会的イメージを当の「おれ」は制御できない。

生徒たちが「渾名」を書き込む黑板以上に広範囲に開かれ「おれ」の社会的イメージを一方的に拡散してゆくのが新聞というメディアだ。「四国新聞」に記された「無暗な嘘」、すなわち師範学生と中学生の諍いに割って入った「おれ」＝「生意気なる某」と山嵐＝「堀田某」を悪し様に報じた記事を見た「おれ」は、「おれの云つて然る可き事」を匿名の他者が喧伝する様に憤るが、この記事も「六号活字で小さく取消」が記されるのみで「正誤」されることはない。「四国新聞」はその名から見ても明らかに地方紙、すなわち四国の「地域社会」と密接に結合したメディアである。

こうした一連の事件を通じて「おれ」が目当たりするのは、「天麩羅先生」「赤手拭」あるいは「生意気なる某」などと記号化され

た「おれ」という教員のイメージが、自身の意思とは無関係に形成され流通してゆく様だ。そしてそうしたイメージは校長が言うように「うそにせよ、本当にせよ。詰りどうする事も出来ない」ものであること、あるいは「毎日「人の前へ出て教育を受けたと威張」る職業」²²であるはずの教員が実社会で「存外無勢力なものだ」ということを「おれ」は知るので。先に見た「教師ははたで見る程業ぢやない」という感覚はまさしく、他者が「はたで見る」教員と実際の教員のズレを物語るものに他ならない。

メディアによって拡散される「地域社会」の言説は、「おれ」の社会的イメージを半ば暴力的に構築してゆく。小笠裕二は、「世間一般の硬直した通り一遍の教育界への認識をも批判」するものとして「おれ」や山嵐の語りを位置づけるが²³、特に「おれ」の語りは、教員という職を取り巻く社会的なまなざしや言説の暴力性をも「批判」の射程に含めている。このテキストが捉えているのは、かつての「おれ」のように教員を「はたで見る」人々の言説が「おれ」という教員像を構築してゆくプロセスであり、そうした社会的な言説に取り巻かれた近代学校教員の姿であると言えよう。

三、「教育の精神」と「武士的な元氣」

(前略) 校長は時計を出して見て、追々ゆるりと話す積だが、先づ大体の事を呑み込んで置いて貰はうと云つて、夫から教育

の精神について長い御談義を聞かした。おれは勿論い、加減に聞いて居たが途中からは飛んだ所へ来たと思つた。校長の云ふ様にはとても出来ない。おれ見た様な無鉄砲なものをつらまへて、生徒の模範になれ、一校の師表と仰がれなくても行かんの、学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないのと、無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十四円で遙々こんな田舎へくるんもんか。(二)

引用したのは、着任直後の「おれ」に校長が「教育の精神」を語る場面だ。このように、教員の世界における「外来者」としての「おれ」を取り巻くのが、「教師」や「教育」とはいかなるものか、いかにあるべきものかを語る教員たちの言説である。

「おれ」によって傍点部のように要約される「教育の精神」は「何も字義通りに実践されることなど期待してはいない」(「公」)のタテマエ²⁴、あるいは「形式的な観念論に過ぎない」²⁵ものとして位置づけられてきた。ただ、校長の語る「教育の精神」を含む教員たちの言説と同時代の教育言説との関係性は、これまで十分に説明されてきていない。以下では、理想の「教育」や「教師」を語る教員たちの言説と同時代言説との重なりあるいはズレを確認してゆく。

明治三〇年代に版を重ね、明治後期の教員観・教職観に大きな影響を及ぼした²⁶沢柳政太郎『教育者の精神』(富山房、明治二八年三月)は、当時の教員たちに要請された「教育の精神」が刻印され

た書物だ。この中で例えば生徒の「良心を啓培し、徳性を滋養」するために「教育者其身を以て範となし、其身を以て率ゆへし」と説く沢柳の言葉は、「生徒の模範になれ」などといった校長の「法外な注文」の内容と一致する。

この書物で沢柳が語るような教員観は、校長のみならず赤シャツによって説かれてもいる。それを確認できるのが「バツタ事件及び呐喊事件」をめぐる職員会議を描く場面だ。「会議の引き続きと号して」校長は以下のように提言する。「生徒の風儀は、教師の感化で正していかななくてはならん其一着手として、教師は可成飲食店押に出入しない事にしたい」。それに対し、赤シャツも以下のように「口を出」す。

(前略)「元来中学の教師などは社会の上流に位するものだからして、単に物質的の快楽ばかり求める可きものでない。其方に耽るとつい品性にわるい影響を及ぼす様になる。然し人間だから、何か娯楽がないと田舎へ来て狭い土地では到底暮せるものでない。其で釣に行くとか、文学書を読むとか、又は新体詩や俳句を作るとか、何でも高尚な精神的娯楽を求めなくてはいいない……」(六)

このように「物質的の快楽」に対する「精神的娯楽」の優位性を語る赤シャツだが、沢柳もまた「教育者たるものは成る可く肉体的快楽を求むへからず」「假令肉体的快楽は得ること難しと雖も、高

尚にして無量の精神的快樂を得へしとすれば、教育者の生涯は幸福なり」と説き、さらには「飲食に依て快を取るか如きこと」を「肉体的快樂」への欲求に根ざすものとして否定する。「肉体的快樂」と「物質的の快樂」、「精神的快樂」と「精神的娛樂」などといった言い方には僅かに違いが見られるものの、それらは實質的に同義であると云って良い。校長と赤シャツは、こうした沢柳の言説を語り直していることとなる。

しかし、だからといって彼らが当時求められた理想的・模範的教員像を体現しているなどと言うことはできない。教員に厳格な精神性を要求し「聖職教師論」なども称される沢柳の教育観は後に『教師論』（同文館、明治三八年一〇月）と『教師及校長論』（同文館、明治四一年一月）にまとめられてゆくが、『教師論』では中等教員に関する言及が増加し、例えば以下のような記述が増補される。

余は断言する生徒に対してやかましく干渉する教師は生徒に親切なるものである。また余は断言する生徒に対してやかましくいはず放任する教師は生徒に不親切なるものである。(中略)しかるに生徒も、その父兄も、一般世間も、この点について大いに間違がつた思想をもつて居る。即ち嚴重にいつたり、干渉する教師は不親切で生徒のなすまま、に許容して居る教師は親切であると考へて居る、生徒や父兄が多い。

ここで沢柳は、特に中等学校において「親切なる教師」「不親切

なる教師」とはいかなる存在かを語っている。ここで展開される沢柳の論理に従うならば、例えば「バッタ事件」をめぐる職員会議の場面で生徒たちに対し「なるべく寛大な御取計を願ひたい」と述べ「穏便説」を展開する赤シャツおよび「赤シャツ党」の教員たちはまさに「嚴重にいつたり、干渉する」ことを避け「生徒のなすまま、に許容」する、「不親切なる教師」としての立場に無自覚ながらも立っていることとなる。同時代のパラダイムに則った教育観を語る赤シャツだが、芸者との関係やマドンナの略奪といった「裏表のある」態度を引き合いに出すまでもなく、一方で彼はパラダイムからの逸脱者でもあるのだ。

四、「優しい」赤シャツ、「人望ある」山嵐

さらに言えば、同じ職員会議の場面で沢柳が「親切なる教師」と位置づけるような存在、すなわち「生徒に対してやかましく干渉する教師」として描かれるのが山嵐であることは明らかだろう。彼は「赤シャツ党」の教員たちが説く「穏便説」に「全然不同意」の意を示し、「硝子窓を振はせる様な声で」自説を展開する。すなわち、「教育の精神は単に学問を授ける計りではない高尚な正直な武士的な元気を鼓吹すると同時に野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩するにあると思ひます」と。

山嵐が説く「武士的な元気」という言葉から、平岡敏夫は「おれ」

と共鳴し得る「佐幕派土族」の意識を見出しているが²⁷、山嵐の語る「教育の精神」について片岡豊は「先の校長の「教育の精神」と一脈相通するもの」だと指摘する²⁸。すなわち校長・山嵐は「とも〈徳育〉を教育の主眼に置いており」「その言わんとするところは同断のもの」だというのだ。

しかし山嵐の語る「教育の精神」の特質は、やはり校長が触れなかった「武士的な元氣」なるものを「鼓吹」し「悪風を掃蕩する」ことの重要性を強調する点にある。明治初期の教員や師範学生に「武士」²⁹土族階級出身者が多かったことはよく指摘されるが²⁹、教育政策に関わった土族出身者である文部大臣・森有礼の影響力はそれ以上に特筆すべきだろう。

明治一八年に文部大臣の座に就いた森は明治二〇年六月に山嵐の故郷でもある福島で二度の演説を行なっているが、そこで彼は生徒の「軽薄ノ氣風ヲ根絶」することの必要性を強調すると共に³⁰、また「氣力精神」の啓発を特に中学校教育上重要なものとして提示する³¹。特に二度目の演説で森が語っているのは、「封建ノ時代」に「氣力精神ノ旺盛」で知られ「今尚其氣風」が感ぜられるという福島の教員、言うなれば「武士的な元氣」に充ちた「会津つば」たちへの期待だ。

これ以前にも森は「生徒ノ氣質ヲ薰陶」することを「良教員」の要件として提示しているが³²、そのような森の言説と先の引用部

で山嵐が説く「教育の精神」は少なからず合致する。「武士的な元氣を鼓吹すると同時に野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩」すべきだと説く山嵐は、森の期待する「良教員」の姿とも重なるのだ。

森は後に沢柳が展開する「聖職教師論」の契機を築いたともされる人物だが³³、もつとも山嵐はこうした教育界の論理を盲目的に絶対化しているわけではない。例えば学校の「御規則」に「大人しく」従って無為な時間を過ごす教員たちを「愚だ」と語る「おれ」に対し「さうさアハ、、、と笑」いつつも「学校の不平を云ふと、いかん」と説く山嵐の姿からもそのことは見て取れよう。つまり山嵐は「御規則」に象徴される「学校」の論理の矛盾を自覚しながらもそれに従い、ただし場合によっては教育界の言説を駆使した自説を展開する教員として造形されているのだ。山嵐が赤シャツにとつての「邪魔もの」たり得ているのは、彼のこうした周到さ故に他ならない。

教育雑誌上の「坊っちゃん」関連記事でも、山嵐は「おれ」以上に好意的に、いわば理想の教員像の如く評価されてきた。「一見は厭や奴で心中は与すべき者」（欽風生）として、あるいは「其変屈な所に大に愛すべき所がある」（羽陵生）教員として位置づけられてきた山嵐について、先に見た「坊っちゃん」の学校観の筆者も「今の学校には此の種の山嵐まことに少なうして、野ダイコ、赤シャツ、狸のみ多きは心細き次第なり」と述べる。

「優しい事も赤シャツさんが優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がえ、」という萩野老夫人の語りが示すように「生徒に一番人望ある」教員として表象される山嵐は、校長や赤シャツに対し「不同意」を表明する異分子であるだけでなく、彼らが語る「精神」を相対化し得る教育言説を内面化した存在でもあるのだ。

以上のように考えたとき、校長や赤シャツ、山嵐とは異なり「教師」としての自意識が希薄な「おれ」の姿も同時に浮き彫りになる。師範教育や教員資格試験（文検）などを経ておらず、「何をしやうと云ふあてもなかつたから」勧められるがまま中学校教員となった「おれ」にとつて、「教師」「教育」「学校」そして教員たちが語る「精神」が持つ意味は軽い。

有光隆司は「おれ」が実質的に一連の事件の「局外者」に過ぎないこと、すなわち赤シャツと山嵐の衝突という「大事件」そのものへの真の参加は最初から拒まれている」ことを指摘しているが³⁴、「おれ」がそのような教員たちの衝突から疎外されていることは、先述の通り「おれ」が「教育界」における「外来者」であること、すなわち彼らが語る「精神」と隔たりを持つ存在であることと無関係ではないだろう。換言すればこの物語の「大事件」とは、教員たちが纏った教育言説同士の闘争であり、「教師」や「教育」、「学校」をめぐる彼らの価値観の衝突でもあるのだ。

おわりに

明治二六～二八年に師範教育にも携わった漱石だが、教員としての彼が以上のような教育言説をどの程度受容していたかは定かでない。もっとも漱石は、明治二六年に東京高等師範学校校長の嘉納治五郎から「教育者として学生の模範になれといふやうな注文」を受けたといったことを度々回想している³⁵。このエピソードは校長の「法外な注文」を想起させると同時に、漱石の間接的な教育言説受容を窺わせるものだと言えよう。そうした意味でも、「高等師範にゐて、窮屈で窮屈で堪らなかつたと言つてい」たという漱石が³⁶、教育関係者を読者として意識し、さらに「教育者をして（中略）深刻に反省せしめん」という「企て」をなしていた可能性はそう容易く否定できない。

ただし冒頭でも述べた通り、ここでの狙いはテキストの諸表現を作者の意図（あるいは無意識）といった枠組にはめ込むことではなく、教育言説の権力の影響下に曝されていた教員読者たちがどのような意味を引き出し得たのかを問うことだ。先述の通り明治二〇年代以降強い影響力を有していた「聖職教師論」が「坊つちやん」の教員読者に連想された可能性は高く、またそうした具体的な言説や書物の連想・特定には至らずとも、明治期の教員に求められた典型的な職業倫理を象徴的に語るものとして、同時代の教員たちは校長

や赤シャツらの言葉を受け止め得たはずだ。

彼らはいずれも「精神」を語る点で共通しているが、そうした観念的な言葉に「おれ」は理解を示すことができない。「教育の精神」を説く校長の「法外な注文」に対しても「おれ」は「そんなえらい人が月給四十円で遙々こんな田舎へくるんもんか」と内心で毒づく。「月給四十円」は当時としては決して悪いものではないのだが、いずれにせよここで展開されるのは教員に向けられた社会的な期待・要求と待遇との乖離に対する「おれ」の批判的な語りだ。

こうした語りが「教育批判」と捉えられてきたことは冒頭で既に述べたが、実際に教員の低待遇や生活難は明治三〇年頃から大正期にかけて教育界が抱える問題の一つだった。石戸谷哲夫は日清戦後の物価騰貴が教員の待遇悪化と教員不足を招いたことを明らかにしているが³⁷、寺崎昌男はその指摘を受けつつ「同じような事態は明治の末から大正期までつづく」と述べ、この時期の社会的状況を沢柳の教師論の登場・受容の背景として位置づける³⁸。

注目すべきは、そのような状況が進行するに伴って「おれ」の語りと軌を一にするような言説が教育界内部においても増加していったことだ³⁹。明治四一年の『教育学術界』に掲載された、「煩悶」と題する小説からもそうした語りは見出される⁴⁰。

もとより教育は神聖でなければならぬ、けれども教育の行使者たる教師その人は、神でもなければ心霊ばかりで生くるもので

もない。やはり霊肉あはせ備はり、精神的欲望ならびに物質的欲望を追求する人類に外ならぬ。だから教員が、俸給の多額ならんことを願ひ、安逸の日のながらんことを望んだところで、それは決して不思議ではない、またこれを咎むべきではあるまい。語り手の「僕」は、「精神的事業に従ふものが、霊を後にして肉を先にするのは、これ疑ひもなく、その本末を誤つたものと言はねばならぬ。」と付け足し、沢柳の言う「肉体的快楽」に対する「精神的快楽」の優位性自体は否定しない。ただし、沢柳の「肉体的快楽を求むへからず」などといった禁欲的思想に対し批判的な言説がこの時期に生まれていたことには注目して良い。このように、いわば「聖職」としての教員イメージの相対化を試みるような議論は他にも以下のような形で展開される⁴¹。

言稍奇に渉るかも知れんが、世人は動もすれば、斯教育者といふ生物を超人視するから、一言是が為に弁じて置きたい、教育者とは何乎、曰く、神でもない獣でもない又草でもない石でもない、矢張人間といふ生物に違ひない（中略）然るに世には動もすれば、斯真人間でない―変式人間―片輪の人間に成れよと教育者に望む者も少くはない、即ち金銭も欲するな、名誉も欲するな、地位も欲するな、権勢も欲するなど謂ふ論者の如きは、正さに其適例である（傍点ママ）

「世人は動もすれば、斯教育者といふ生物を超人視する」と、社

会的に構築された教員イメージに触れた上で、「教育者」も「矢張人間といふ生物に違ひない」こと、いわば教員の「人間」性を傍点付きで強調する。小学校教員をターゲットとした言説ではあるものの、ここにおいて試みられているのも「世人」いわば教員を「はたで見ると」人々によって構築される教員イメージの相対化に他ならぬ。明治四〇年代にこうした言説が教育関係者によって提出されつつあったことを踏まえるならば、校長の「法外な注文」に対する「おれ」の語りも、先に触れた峰間鹿水のみならず多くの教員に共鳴し得るものとして捉えられよう。

以上見てきたように、「坊つちやん」は赤シャツたちの「裏表のある」態度だけでなく、教員を「はたで見ると」人々の言説や、時に教員の「人間」性をも剥奪し得る教育界内外の言説を「批判」の射程に含むテキストだったと言える。こうした問題意識が同時代の教員にも共有されつつあったことは先述の通りだ。言うなれば、「おれ」だけでなく明治四〇年代の教員たちもまた、教員を拘束する「法外な注文」や「教育の精神」に抗おうとしていたのだ。

「教育界の裡面」を描く「諷刺小説」といった評価に終始していた「坊つちやん」は、「諷刺」され「批判」される立場にあった「教育界」内部の読者たちによって「大教育書」としての価値を見出されながら受容されてゆく。教育関係者という読者層がこれまでに知られてきた所謂〈同時代評〉と必ずしも重ならない〈読み〉を提出

してゆく様相がそこから見出されるとすれば、それは以上のようなテキスト内の表現及び歴史的背景と併せて理解される必要があろう。

*引用に際して傍点は特記のない限りすべて私に付し、旧漢字は現行のものに改めると共にルビは削除した。なお本稿はJSPSS科研費（特別研究員奨励費・課題番号16J00019）による成果の一部である。

注

¹ 松本博邑「在校当時を偲ぶ」『保惠会雑誌』昭和十三年二月

² 橋本暢夫『中等学校国語科教材史研究』(溪水社、平成十四年七月)によれば、漱石作品を教材化した初めての教科書は「吾輩は猫である」の一節を採録した吉田彌平・小島政吉・篠田利英・岡田正美 共編『女子国語読本 巻五』訂正五版(金港堂、明治三十九年二月。未見)であるという。

³ 三浦修吾「姫路師範学校主事」は「子の愛読書」『教育学術界』明治四〇年四月)で自らが「好んでよむもの」として漱石や島崎藤村、徳富蘆花などの名を挙げ「こは予一人にあらず」と述べる。明治三十九年に岡山県師範学校を卒業した岡崎勉も、「若かりし日を索ねて」(國宮友次郎 編『創立五十年記念』岡山県師範学校同窓会、大正一三年一月)において「桂月、蘆花、紅葉、涙香等」に加えやはり漱石の作品が当時生徒たちに人気を博していたことを回顧している。

⁴ 三浦圭三「吾輩は猫であるを読む」『教育学術界』明治三十九年三月)。少し時期は下がるが「道草」についても同様に一記者「漱石の『道草』」『教育学界』大正四年二月)がある。

5 この問いに答えるものではないが、「坊っちゃん」への読者論的アプローチは木村功「坊っちゃん」論——『ホトトギス』読者層からの射程——玉井敬之編『漱石から漱石へ』翰林書房、平成二年五月）において既になされており、『ホトトギス』読者層の価値観とテキストの表現がいかに噛み合っているかが分析されている。

6 イヶ崎暁生『坊ちゃん』にみる中教審路線——夏目漱石『坊ちゃん』（『文学でつづる教育史』民衆社、昭和四九年八月）

7 小笠裕二「坊っちゃん」小考——明治三十八年の学校騒動——（『稿本近代文学』昭和六一年二月）。また、小笠論を展開するものとして、教育雑誌に掲載された「学校騒動」関連記事にも目を配りながら「坊っちゃん」が「大衆性」を獲得しえた「背景を考察する佐藤良太」メディアの中の「坊っちゃん」——雑誌教育関連記事を視座として——（『仏教大学大学院紀要』平成二〇年三月）もある。

8 松岡譲『漱石の印税帖』（朝日新聞社、昭和三〇年八月）によれば、『鶉籠』の検印部数は初版（明治三九年）三〇〇〇部。以降一年刻みに五〇〇〇部、九九六部、五〇〇部、八〇〇部、五〇〇部と推移し、大正二年には累計一二七一部に登ったという。また木村功（前掲）は、明治三九年当時「ホトトギス」発行部数が約五五〇〇部程度であったとする漱石の記述を紹介している。

9 B M「時評」（『文章世界』明治三十九年四月）

10 木人「坊っちゃん」（『朝日新聞』明治三十九年五月二八日付朝刊）

11 川路柳虹『夏目漱石氏の鶉籠』（名著評論社、大正四年一月）

12 木藤生「中等教員の裏面」（『教育界』明治四〇年一月）

13 羽陵生「愛媛県教育者評判記（中）」（『教育界』明治四五年八月）。なお、漂壽生「読愛媛県教育者評判記」（『教育界』明治四五年一〇月）は、羽陵生が愛媛出身の教育家・相原熊太郎であることを明らかにしている。

14 羽陵生「愛媛県教育者評判記（下）」（『教育界』明治四五年九月）

15 B M（前掲）、無記名「坊っちゃん」物語」（『文章世界』明治三十九年二月）など。

16 横山健堂編『峰間鹿水伝』（峰間氏還暦祝賀会記念刊行会、昭和八年九月）参照。

17 師範学校の卒業生は卒業後、尋常師範学校卒業生服務規則（明治一九年五月二八日文部省令第一二号）に従って小学校での教職に就くことが義務づけられていた。

18 教育関係者によるこの小説の評価や、その具体的な分析については拙稿「田舎教師」の欲望をささげる——明治四〇年代、教育界のなかの文学——（『日本文学』平成二八年九月）を参照されたい。

19 阿部和正「ねじれた近代——『坊ちゃん』における命名と移動——」（『日本文学』平成二六年九月）

20 大野淳一「渡りもの」の教師たち——「坊っちゃん」ノート——（『武蔵大学人文学会雑誌』昭和五七年三月）

21 W. ウォーラー「学校集団——その構造と指導の生態——」（石山脩平・橋爪真雄訳、明治図書出版、昭和三二年一〇月）

22 小森陽一「矛盾としての『坊っちゃん』」（『漱石研究』平成二一年一〇月）

23 小笠裕二（前掲）

24 小森陽一「『坊っちゃん』の〈語り〉の構造——裏表のある言葉——」（『構造としての語り』新曜社、昭和六三年四月）

25 佐藤裕子・増田裕美子・増満圭子・山口直孝編『坊っちゃん』事典』（勉誠出版、平成二六年一〇月）「校長」項目執筆者・高野奈保

26 寺崎昌男「解説 教師像の展開」（海後宗臣・波多野完治・宮原誠一監修、寺崎昌男編『近代日本教育論集 第6巻 教師像の展開』国土社、昭和四八年二月）

27 平岡敏夫「坊っちゃん」試論—小日向の養源寺—(『文学』昭和四六年一月)

28 片岡豊(没主体)の悲劇—「坊っちゃん」論—(『立教大学日本文学』昭和五二年二月)

29 石戸谷哲夫『日本教員史研究』野間教育研究所、昭和三年二月)

30 「六月廿二日文部大臣福島県ニ於テア官群区長及ビ教員等ヘ説示ノ要旨」(『大日本教育会雑誌』明治二〇年八月三〇日)。なお森の演説については、大久保利謙 編『森有礼全集 第一巻』(宣文堂書店、昭和四七年三月)を参照・引用した。

31 明治二〇年六月二四日の演説、「福島県若松小学校ニ於ケル演説」(『大日本教育会雑誌』明治二〇年一〇月一五日)。

32 「明治廿年五月廿五日文部大臣第一地方部府県尋常師範学校長会同ノ席ニ臨マレ各府県学事ノ状況ヲ聞カレタル後演説セラレタル要項ノ筆記」(『文部大臣の演説』『教育時論』明治二〇年六月一五日)において森は「教員ハ生徒ノ氣質ヲ薰陶セサレハ良教員ニハアラサルナリ」と説く。

33 注26に同じ。

34 有光隆司「坊っちゃん」の構造—悲劇の方法について—(『国語と国文学』昭和五七年八月)

35 「私の個人主義」(『孤蝶馬場勝弥氏立候補後援 現代文集』実業の世界社、大正四年三月)。同様の経験は「処女作追懐談」(『文章世界』明治四一年九月)にも記されている。松村昌家・相原和邦「注解」(『漱石全集 第二巻』岩波書店、平成六年一月)など参照。

36 小宮豊隆『夏目漱石』(岩波書店、昭和一三年六月)

37 注29に同じ。

38 注26に同じ。

39 沢柳もこうした状況を察知してか、『教師論』第四章第六節「教師も人間

である。」において「世人」が抱く教員イメージの「矛盾」すなわち「常に教師を遇すること冷淡酷薄を極めて居りながら、勝手のときには聖賢の如くあるべきであるといふて責める」ことに言及するものの、「聖賢」としての教員像については否定しない。「清貧」(『教育者の精神』)や「節儉貯蓄」(『教師論』)を教員の「美德」として提示する沢柳が、物質的・経済的報酬を望まず「教育」を自己目的化する教員を理想化していたことは明らかだろう。

40 抱樞生「煩悶」(『教育学術界』一七—四、明治四一年七月)。のちに沼田笠峰の小説集『教員室』(同文館、明治四五年五月)に採録されているため、書き手は『教育学術界』や『少女世界』の編集に関わった教育家の沼田笠峰(藤次)であることが分かる。

41 狩野有景(力治)『模範の小学教師』(良明堂、明治四三年二月)

——でき・りょうすけ、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学——